

**阿部 貴司 戦国寿司時代で生き残るために—How to survive in the SUSHI industry**

阿部さんの研究テーマは、回転ずしチェーン店の現状分析と今後の生き残りについてです。3年生のときには、強く興味をもっていることがないということで、テーマのアイデア出しに苦労していた印象があります。そういうときには、ごく身近な生活の中でとても気に入っている場所や瞬間を話してもらうことにしています。阿部さんの場合、三田市内を散歩するのが好きだということでしたが、これぐらい身近なところで生活を振り返ると、今まで思いつかなかったテーマが見えてきます。その後、阿部さんは、自分が惹きつけられることを考え直し、アルバイト先の店長と対話を行った結果、回転ずしをテーマに決めました。自分には興味があることが何もないと思っていた阿部さんが、とても具体的でユニークなテーマを次第に見つけていった過程は、誰もが自分にとって本当に関心のある課題を見つけ、育てていけるというよい例です。

卒論では、こうしたテーマ決定までの過程を問題意識としてまとめたのち、関連文献をレビューし、回転ずしチェーンの大手3社について、主に、メニュー、広報、サービス、海外進出の観点から、特徴を分析しました。7冊の関連文献のまとめは、自分の問題意識と関連づけた批評となっており、また、各社の特徴を分析する観点も、3社の違いがよく見える的確なものだったと思います。さらに、実際に回転ずしを訪れ観察するという、ミニ・フィールドワークも行いました。フィールドワークの回を重ねれば、分析の独自性と説得性がより高まったのではないかという点は惜しいですが、時間と経済的制約の中でフィールドワークを実施したことは評価できます。結論（阿部さんがいうところの「お会計」）で、回転ずしを「外食産業」の一つにすぎないと、突き放して述べた箇所が印象的です。タイトルや章立てを見ればわかるように、阿部さんには、何かを工夫することに熱心な側面と、物事から距離をとり相対的に捉える側面があるようです。

**梅崎 健人 海外長期留学の意味—これからの人生を豊かにするために**

梅崎さんは2016年度から本ゼミに所属し、3年生終わりの進級論文までは、日本の英語教育に疑問をもち、英語力の必要性和可能性について論じようとしていました。英語を使う人が大勢いる現代において、英語が使えると人生の選択肢が広まるという考えだったと思います。その後、2017年度に海外留学に出かけた梅崎さんは、その留学で難民と出会った経験から、一時は難民問題に取り組むことを望んでいたのですが、クラスメートから質問を受ける中で、このテーマでは一般論以上の結論を出すのは難しいと考え、海外長期留学の意義という、梅崎さん個人の経験と思いをさらに生かすことのできるテーマで卒論を書くことに決めました。

考察の対象は、主に海外留学を経験した同世代の友人へのインタビューと、異文化経験や留学に関する文献でしたが、論文の中で特にインタビューが効いています。インタビュー・データからは、友人が海外生活で得たもの—自国で感じる息苦しさを抜け出し、別の海外で働くという選択肢、それを実現しようとする意志と積極性—を詳しく楽しい様子で語ったことがうかがわれ、梅崎さんが、丁寧に聞き出し、また文章化も丁寧に行ったことがわかります。この友人が留学から得たものと梅崎さんが得たものとはかなりの部分で重なっており、海外長期留学の意義について説得力をもって主張できていると思います。

この卒論全体の中では、進級論文の時に比べ、英語力の大きさは相対的には小さなものになっています。非母語環境に長く住みそこで何かを実現しようとするれば、程度の差はあれ言語力が身に付くのは当然のことです。何を実現しようとするのかを決め行動に移すことができれば、それに必要な力は自然に得られます。梅崎さんは、留学に行く以前は個人の意見をあまりもっていなかったと書いていますが、自分で決める力は以前からもっていたと思います。海外で暮らすという将来に向かって、どんなふうに歩いていくのか楽しみです。

## 大根田 梨乃 日本に住む国際児が抱える問題と教員養成課程における提案

大根田さんは、ゼミに入ってきた当初、日本語教育に興味をもっていました。しかし、なぜ大根田さんという人が、その問題に取り組まなければならないのかについては不明瞭な部分があり、3年生の間は問題意識の明確化に取り組みました。そして、小学校時代を振り返ったり対話活動を行ったりすることで、日本語能力を上げることだけでは問題の解決にはならないと考えるようになりました。日本語能力が十分に思えるような子どもたち（大根田さんの命名によれば「隠れた子ども」）であっても、ことばの問題をもっている場合もあります。しかし、周囲がそうした問題があるかもしれないという認識をもたない限り、優れた日本語教育の方法があつたとしても、それを使うことにはつながりません。大根田さんが現役教員との対話から明らかにしたように、教員も問題が潜在する可能性を認識できておらず、対応方法もわからないという現状があります。教員養成課程において海外にルーツをもつ子どもたちについてわずかでも教えるという大根田さんの提案は、教育政策が決定しさえすれば実現できるものだと思います。

「おわりに」には、自分の生徒や子どもが海外にルーツをもつかもしいないこと、そうした子どもたちを日本の学校に預けることの怖さという、この研究テーマに取り組んだ理由が書かれています。「はじめに」にはなかった問題意識の表明です。当初は書けなかったのか、それとも自分でも気づいていなかったのかはわかりませんが、卒論を執筆する過程のおもしろさを感じさせます。今回の卒論は、大根田さんの選んだ仕事に直結する内容です。現場に立つとなかなか思うようには振り返りの時間を取れないかもしれませんが、卒論で取り組んだように考えを文字にことばにしていくこ

とがいろいろな問題を、遠回りのようで実は一番近い形で解決することにつながると  
思います。

### **小川 太一 若者の精神病の現状と打開策—アドラー心理学の可能性を信じて**

小川さんは海外にバックパッカーとして旅行した経験が豊富です。そこで英語を  
使って現地の人と関わっていたことから、日本人はなぜ英語に苦手意識をもっている  
のかを、教育やネイティブ信仰の観点から考えようとしていました。しかし考えてみ  
れば、日本人が英語に苦手意識をもつことに問題があるのか、英語が話せたほうがよ  
いという小川さんの前提はどこから来るのかと考えていくうちに、小川さん自身の日  
本への外国人旅行者向けの通訳者という夢が見えてきて、そこで卒論のテーマは固ま  
るかに思えました。しかし就職活動の中で自身の信念を聞かれることがたび重なり、  
著名な自己啓発書を読み漁るようになりました。

ただ、その自己啓発書がいくら優れているからといって、それをまとめただけでは  
要約ではあっても小川さん独自のテーマにはなりません。どうなることやらと今後  
の展開を少し心配していたところ、自己啓発書のひとつとしてアドラーの『嫌われる  
勇気』を手に取り、そこに強い可能性を見出しました。就職も決まった小川さんでし  
たが、自分自身の中に優越感や劣等感を抱きやすい性質があることや、今の日本で生  
きることに希望が見いだせないという思いがあり、さらに周囲に精神病を患った知  
人・友人が多くいたようです。卒論では、その友人・知人たちの困難に自分自身を重  
ねるようにして、若者をうつ病や自殺に追い込む原因を考察しました。そして、現状  
の行政による若者支援について、意欲をもつ者への働きかけはしても、生きるか死ぬ  
かで苦しみをもっている者を排除していると、鋭く痛烈に批判しました。制度的な支  
援が届かない現状で、解決の希望の一つとして、アドラー心理学に基づき、本人や周  
囲の意識を変えることが提案されています。アドラー心理学のキー概念が簡潔にまと  
められており、日々出会う人間関係にまつわる苦労を意識上で、さらには実際上で改  
善できるのではと感じました。自分にも他者にも「どうして？」と思いつける小川さ  
んにとっても、繰り返し参照できる座標軸のようなものが得られたのではないでしょ  
うか。

### **加藤 理紗 海外留学におけるストレスの軽減方法とはなにか**

#### **—今日の事前研修と異文化間カウンセリグの重要性を考える**

加藤さんの出発点は、短期留学中に自らが経験した、ホストファミリーとのトラ  
ブルにありました。留学期間中もまた日本に戻ってからも、非常に辛かった思い出と  
して残っていました。ではそうした問題はどうすれば解決できるのでしょうか。加藤  
さんが3年生の時に考えていたのは、トラブルを予防するために、事前に留学先の  
文化的特徴を知識として理解しておくということでした。各国ごとの違いを面白いと  
感じていたこともあり、文化的な特徴をまとめていく方向に進んでいました。ただ、  
そもそもの出発点からすれば、本当に事前に文化的知識を得ておけばトラブルが防げ

たのだろうか、また加藤さんにとって問題だったのは、留学先でのトラブルから受けた強いストレスであり、これを解決するためにはもっと別のアプローチがありうるのではないかという流れで、研究のテーマや分析対象が焦点化されていきました。加藤さんの卒論執筆のプロセスは、個人の問題の出所を見つめることで、研究テーマもオリジナリティの高い具体的なものになっていくことのよい実例です。

最終的には、先行研究から、留学前の事前研修の実例と限界、受け入れ体制を整備することの重要性を指摘しました。異文化間カウンセリングの知見をもった専門家による、コラージュを用いた研修は私もまったく知らなかったものでしたが、加藤さんの詳しい紹介からはとても効果的な方法に思えました。また、受け入れ体制を整備にあたって、異文化間カウンセリングの専門家が必要であるという提言にも、留学生受け入れにこれまで関わってきた立場から強く共感しました。事前研修や受入体制に頼りすぎるのもよくないという結論も、先行研究を分析したからこそ得られた、加藤さん自身にとっても読み手にとっても説得力のある結論になりました。

### 岸 笑里 タイタニックに恋をして—映画でみる女性像の変化

岸さんは、子どものころから親しみ楽しんできた映画をテーマに選びました。アメリカで製作された映画を対象に、女性がどのように描かれてきたのか、戦争やフェミニズム運動とも関連付けながら、その変化を追いました。『タイタニック』の魅力をまとめるという最初の目標から、自分にとっての魅力の源泉を探ったことで、女性像の変化という、岸さん独自の分析視点を得ました。

この論文の最大の特長は、主な分析対象だけで、も23本、その他にも含めれば合計57本に上る映画作品が取り上げられている点です。しかも、たとえわずかに触れただけの作品であっても、研究テーマにそった要約が付されており、岸さんがすべての映画を鑑賞し、ストーリーを把握した上で分析をおこなったことがうかがえます。卒論を書くよりずっと以前から映画鑑賞を行ってきたことが、作品の筋やポイントをとっても正確に読み取ることにつながったのではないかと思います。また、このようにひとつひとつの作品を分析している点で、この論文は質的手法に基づいて分析されていると言えますが、一方で、取り上げている作品数から言えば、量的にも説得力が高い論考となりました。

家庭内で従順な女性、抵抗する女性、戦い勝ち取る女性という、女性像の変化の在り方も明確です。ではこの先、女性は映画作品でどのように描かれていくのでしょうか。また、日本の映画は、アメリカの映画と異なった女性像の変化が読み取れるのでしょうか。岸さん自身も文献の引用として書いているように、映画は社会を反映するだけでなく、社会を作っていく力ももっていますので、岸さんは、今後、映画作品がどのようになっていくと予想するのか、どのようになってほしいと願っているのか、考えを聞いてみたいところです。

### 古賀 裕子 殺処分ゼロの世界を目指すために—動物権と犬権を踏まえながら

古賀さんは、4年生になってから研究テーマを変えました。3年生はポーランドに留学しており、その時には日本語教育、特に文化と結び付けた教育の可能性について考えようとしていました。しかし帰国後に、自分にとって本当に切実なテーマ・問題解決のために卒論を書いてほしいという私の方針を再度伝えたところ、犬の殺処分について強い憤りを感じており、それを減らすために卒論を書きたいという希望をもちました。家族として犬のカイクンを買っているという古賀さんにとって、いったんこのテーマを決めたあとは筆が止まらなかったようです。

犬の殺処分ゼロをめざすといっても、そのための研究の在り方は多岐にわたります。古賀さんの場合は、殺処分ゼロを達成しようとしている国、ドイツや熊本の施設について調べることから始まりました。しかし調べていくうちに、ドイツや熊本の事例では、いったん飼育放棄された犬に再度飼い主を見つけたり、ドイツでは飼い主が見つからなくとも終生施設が保護したりするという取り組みをしているものの、ドイツや熊本であっても、飼育放棄や虐待そのものはなくなっていまいことに限界も感じるようになります。そこで、動物の権利や犬の権利という根本的な理念についてまとめることとし、それを踏まえて、飼育放棄が起こらないようにするための政策的な制度作りや、個人の意識に働きかける仕組みを提案しました。

最後の「私の家族への手紙」は、古賀さんが、飼い犬が飼い主に送る手紙として執筆したものです。飼い主家族が認識しなければならないことを、飼い犬の気持ちに寄り添いながらも、端的かつ必須のこととして強く訴える内容となっています。犬を飼っている人、飼い始める人へのメッセージとして、公開されるべきものだと思います。

## 柴山 詩織 “旅” とは一旅をする意義とその魅力について考える

柴山さんが旅をテーマとしたとき、対話相手との旅への考え方が近かったこともあり、自分にとっての旅の意義を平凡なものとして捉えていました。ショッピングや当地の料理を食べるといった、リラックスや楽しみのための旅です。ただ柴山さんは、旅行好きでない人にもその魅力を伝えたいと考えていたので、私からは、同世代の若者の旅の傾向を調べた上で、インタビューを行い旅の楽しみ方をいくつか示すのはどうか、と提案しました。しかしいろいろな旅の姿の一例として、社会学者・新原道信の『ホモ・モーベンス』を読んだことで、旅の具体像を例示するという方向性に違和感をもつようになったようです。

そして、前述の新原の著書、思想研究者の鶴見俊輔の『旅と移動』を読み込み、旅の意味を考察した結果が、卒論としてまとまりました。新原の著書からは、異質性との出会いが痛みを伴う自己確認につながり、またそうした意味での旅は必ずしも空間的移動を必須としないこと、鶴見の著書からは、移動せざるを得ない形での旅からも得られるものがあること。柴山さんはこうした考察を行いました。旅行のマニュアルを示すことから、意志的・非意識的な、さらには移動さえ伴わない旅の可能性を述べ

ることへと、柴山さんは、旅というものの在り方自体を問い直すことになりました。こうした問い直しの結果からすれば、海外旅行が好きではないと話していたクラスメートでも、「ホモ・モーベンス」であろうとしているなら、旅をしている者であるかもしれません。柴山さんの今後の旅は、どのようなものとなるのでしょうか。

## 田邊 史歩 私らしい表現の見つけ方

文章の形式的な特徴を扱う研究分野の一つに、「文体論」と呼ばれるものがあります。私自身は、大学時代に日本文学を専攻しつつ、日本語教育にも興味をもっていたこともあって、「文体論」の研究方法に強い関心をもっていました。文学の分析はとかく主観的になりがちですが、「文体論」で、文章の形式から作品を論じることができれば、客観的かつ実証的に作品や作家の特徴を示すことができるのではないかと考えていたためです。しかし、いろいろと試行錯誤を繰り返すうちに、客観的に見える「文体論」は、誰にでも言えることをもっともらしい形で示しただけなのではないかと疑問を持つようになりました。なので、田邊さんが最初、よい文章の特徴をまとめたいというアイデアを話してくれた時、一般的な文章論になってしまうことを一番心配しました。その後、よい文章とは何かを考えるうちに、田邊さん固有のよい文章観というものがあることがわかり、今回のような一次データに基づいた、田邊さんしかできず田邊さんに真に意味のある、しかし結果的にほかの読者にとっても得るもののある論文になりました。一つ一つの例に説明を付し、その特徴を自分のことばで表現することはとても時間がかかる作業だったと思いますが、田邊さんがなぜその文章に価値を見出したのかが丁寧に示されており、それが最終的に、ある特徴的な文章のスタイルの持つ可能性という一般化も可能な分析結果につながっています。

田邊さんの論文は、自分が集めた文章という、一次データを核として分析を行いました。一次データというのは、目的のために自分で集めたデータのこと、二次データをまとめたものは二次データと呼ばれます。基本的に他者の書いた本や文献は、二次データのことが多いです（国や自治体が出している政策提言や報告書などは、それを一定の基準で収集し分析した場合は、分析者自身が集めた一次データと言えますが、そうした論文は今回の4年生のものでは見当たりません）。その意味で、映画を分析した岸さんの論文と、この田邊さんの論文は、集められたデータ自体にもオリジナリティがあると言えます。

## 陳 東梅 おもてなしの接客—中国人に対する提案

陳さんは、日本語クラスの担当者時代から、私の少人数クラスで一緒だった留学生です（本ゼミの陸さんも）。日本語クラスでは、陳さんは日本語の配慮表現に興味を持っていました。日本人とのコミュニケーションでうまくいかなかった経験があったことから、配慮表現を研究し知ることができればコミュニケーションがうまくいくと考えていたと思います。その後、陳さんは、接客のアルバイトで働き、日本の接客方法にすばらしさを感じたこと、また自分自身も接客が好きだということを生かし、

日本企業の接客（「おもてなし」）について研究することにしました。東京オリンピックの決定で「おもてなし」が流行したこともあり、このテーマで研究すると、日本文化の一般論をまとめなおすような、オリジナリティの低い論考になる恐れもありました。

陳さんがバイト先の店長に行った対話では、日本が特別に接客に優れているとは思わない、他国とは背景が違うので比較するのはおかしいといったことが率直に語られています。この語りについて、陳さんは当初、それでも日本のすばらしい接客について調べるといって続けていこうとしていました。しかしその後、何のために接客について調べるのかを見つめ直し、将来自国で日本式の居酒屋を開店したいという目的がはっきりしてからは、単に日本文化に由来する「おもてなしの接客」という主張ではなく、それがどのような点で優れているのかという具体的な分析に進めることができました。さらに、中国での居酒屋開店という点で先行研究を振り返ると、広い中国に住む多様な人々に対し一律の接客方法を提案している文献が多いこと、中国の各地方出身者に添った接客の在り方が提案できるのではないかとということ、また、日本の企業に限らず、中国で成功した飲食店に学べるものがあるのではないかと、どんどん考察がつながっていきました。特に、中国の飲食店の分析は私の念頭になかったもので、陳さん自ら中国から文献を取り寄せるなどしました。1年生のころから陳さんを知っている私にとっては、自分で考え表現する力が非常に伸びたと思います。

## 西村 淳 日本社会におけるボランティアの存在意義について —「つながる」ことで広がる私たちの可能性

西村さんは、大学に入ってボランティア・サークルに入り、知的障害者の支援活動が続けてきました。その中で、西村さん自身は、障害者の方々との関りを深めることに楽しみを見出したり、知的障害者をめぐる世論に興味をもったり、さらに自分自身のことや将来の進路を探し出すなど、とても多くの恵みを受けてきたという実感を深めていました。しかし、日本社会の中では、各地で起こる大規模災害や東京オリンピックに関連してボランティアがブームになる一方で、西村さんも書いているように、偽善的な行為であると言った批判もあります。こういった批判に対しつつ、ボランティアに関わっていく人々（社会）を増やすために、西村さんは、ボランティアを自身で定義づけ、歴史や世界各地のボランティアの比較、日本社会のもつ現代の問題、それに解決の糸口を与えてくれるボランティアという流れで議論を進めました。引用されただけでも48本の多種多様な文献を読み、西村さんの主張を根拠づけていきました。

第3章の日本社会の「いじめ」や労働環境といった問題は、一つ一つが卒論の個別のテーマになりうるものです。その点では、こうした大きな問題についての各論が挿入されることで、ボランティアの意義を述べるという論文の目的が曖昧になってしまうのではないかと心配はありました。しかし西村さんにとっては、ボランティアの意義が今一つ広まらないことや、運営や意味付けについての課題が山積みである

ことの根本的な原因として、日本社会が抱える問題は、この論文で削ることができない部分でした。同時に、ボランティア活動に参加する人が増えるような社会に変わるなら、日本社会で起こっている問題も解決するという見込みも、西村さんの重要な主張の一つです。まず始めてみることで、会社が学校とは違う「第3の場」での新たな「つながり」が得られ、生きることの意味を見つけ出す機会ともなるという指摘は、大勢の人々のボランティア活動への参加を後押しするでしょう。

私にとって新たな知見で特に印象的だったのは、ボランティアはそれを運営するプロ（有償）も必要とする、学校での清掃活動などもボランティア活動を始めるきっかけになりうる、スウェーデンのボランティアは子どもの通うスポーツ関係の活動なども含む、また同じスウェーデンでは教育や福祉はボランティアに頼るべきではないと考えられている、といったことでした。西村さんの論考を読むと、今までボランティアと考えられていなかったようなことも実はボランティアに入っているのだと気づかされ、自分自身も無意識にそうした活動にすでに関わっている可能性があるのだと思いました（たとえば、地域のお祭りへの参加やPTA活動なども）。ボランティアに依存している外国人の日本語教育支援と関連して、教育・福祉をプロフェッショナルが担うべきとするスウェーデンの政策方針にはとても共感しました。西村さんには、これからも「第3の場」で活躍してもらいたいですし、周りの人もそこに巻き込んでほしいと思います。

## 陸 キン 震災時に外国人を守る

陸さんの問題関心は、2年生から変わらず、外国人の防災でした。四川地震での被害を知ったことと、地震多発国である日本に留学し防災センターを訪れたことがきっかけです。他の留学生が災害にどこか楽観的であるのに対し、陸さんは留学先で地震に合い命が奪われるのではないかという強い恐怖感をもっていました。研究を進めるにあたって、具体的な考察の対象をどうするかという点については長く決めかねていましたが、7月初めの大阪での地震を一住民として経験し、国レベルと同時に、特に大阪府で行われている取り組みに着目しました。

政策側の提言や対策をまとめた部分からは、現状把握にとどまった印象も受けましたが、結論部分で、そうした取り組みの実行性に疑問を投げかけ、陸さん独自の提言も行いました。外国人住民に対する防災意識の形成、防災訓練の実施に関しては、政策側がいくら準備をしても、現状では外国人住民の参加率が低く、どうそれを高めるかが課題であること、特に若い世代の情報獲得手段はスマホなどに限られ、それらへの接続が不可能になる震災発生時に対応するためには日常的にコミュニティとのつながりをもっている必要があること、外国人観光客も含め、多言語防災アプリなどの存在自体が知られておらず、周知が必要であること、などは具体的で確かにそうした改善が必要と思わせる指摘です。今後は、この陸さんの提言の必要性を実証したうえで、提言を実行するための具体的な方策を考えてほしいと思います。国や地方自治体、地域や学校、企業、NPO 団体などが連携していくためには、役割分担を明



確にしていくことも必要です。陸さんが、特にどのレベル、単位での取り組みを重視しているのかを考えてみると、研究フィールドの焦点が大阪府よりもさらにしぼられ、方策の提案もより具体的になるのではないのでしょうか。

## 劉 一欣 社会におけるコミュニケーションスキルと国語

劉さんは、塾などで教えた経験もあって、子どもたちの国語力低下に問題意識をもっていました。また、自身の就職活動を経て、そうした国語力の低下がもっとも影響を与えるのは、労働の場としての「社会」だという考えを得ました。また友人との対話活動も行い、劉さんが特に重要視しているのは、国語力そのものというより、それによって培われるはずの「社会」で仕事をするときのコミュニケーション能力であることが明らかとなりました。その後、「社会」に出る以前は親密感を高められればよいが、「社会」では、仕事を成功させるためのコミュニケーション能力が求められるという指摘は、今回の論文執筆過程で得た、劉さんにとっての新しい視点だったように思います。卒論では、「社会」で求められるコミュニケーション能力の内容、その基盤となる国語力低下の原因と改善策についてまとめました。

劉さんはコミュニケーション能力とは何かについて、前述のような自分としての定義を得ましたが、もう一步進めて、今度は「社会」とは何かを考えてみてはいかがでしょうか。劉さんがいう、仕事で求められるコミュニケーション能力が、子ども時代の教育を基礎として育成されるとしたら、子どもも子どもなりの「社会」の中でコミュニケーション能力や国語力を育てていくと思います。また、劉さんが言う仕事の場という「社会」に出る前であっても、大学生の友達同士が何らかの問題を解決していく機会（テスト対策でもサークル運営でも、飲み会の場所を決めるのでも）は必ずあります。社会人になっても職場だけが「社会」ではないので、誰に対しても分け隔てなく接することのできる劉さんの特技を生かし、いろいろな場で新たな「社会」を作っていくようなコミュニケーション生活を送ってほしいと思います。